

幼稚園の現場から

IV

鶴谷主一

原町幼稚園(静岡県沼津市) 園長

◆あるショックな出来事

昨年12月に幼稚園の音楽会を行いました。市民文化センターを借りて大舞台での歌と合奏の発表です。それぞれのクラスの発表も上手くできて、私たちスタッフも、保護者も満足してニコニコで幕を下ろしたのであります。

その日にその事件は起こりました。事件といっても、何か表立って大きなことが起こったわけではありません。しかし、当事者と私をはじめ幼稚園スタッフにとって、心理的に大きな出来事でした。

それは休憩時間、あるお父さんがロビーに出たときに聞こえてきました。「Aちゃんとは、来年同じクラスになりたくないね」。誰が言ったかわかりませんが、雑然とした人混みの中で聞こえてきたといいます。Aちゃんは障害を持っています。そしてお父さんはAちゃんの父親でした。

音楽会の数日後、お父さんから話があるとの連絡があり、面談しました。そこで音楽会のときの話と「幼稚園に迷惑をかけるなら退園してもいい」という話を聞かされました。大変なショックを受けました。園長として自責の念と、音楽会の会場で皆が浮かれた気分の中、ひとりその家族だけは傷つき、孤立感を強めていたことを思うと、悲しくて仕方あり

ませんでした。なにも知らないで浮かれていた自分もバカみたいに思えました。



♪音楽会オープニングで歌う園長(中央)

※写真と本文は関係ありません



♪年長組が2クラス合同で歌っています

◆Aちゃんのこと

Aちゃんは年少児です。入園するとき障害の有無はわかりませんでした。入園してしばらくたってから言葉が出ないことと行動がおかしいことに気づき、しばらく観察し、親御さんに話をするタイミングを見計らった上で受診を勧め、やっと5月下旬頃発達が遅れていることが診断されました。

園では、これまでも障害児の受け入れは行ってきており、年中組にも軽度の自閉症児が2名おりましたので、教員を加配するなどの対策をとり、そのまま在園してもらうことになりました。

現実には思ったより大変でした。Aちゃんは言語障害と発達遅延からクラスの子どもとのコミュニケーションはまだまだです。ことばでコミュニケーションがとれないぶん、ボディータックで友だちを驚かせたり、たまに手が出て友だちを傷つけたりすることもありました。クラスの子どもたちもだんだん恐がるようになり、その頃から保護者から園の対応について意見が寄せられるようになってきました。

そこで、6月の父親参観日にはクラスの父親が全員集まるので、Aちゃんのお父さんに皆の前でひと言挨拶をしてもらったり、担当教員を固定して対応をはっきりさせました。園の対応としては通常の対応でした。そして、12月の音楽会までには、担当教員の努力もあり、クラスメイトに比べれば10分の1程度ですが言葉も出始め、部屋の中で落ち着いていられる時間も長くなってきていました。彼なりに発達はしていたのです。

◆思い出したこと

この出来事のこと思い出したことがあります。数年前の3月、年長組卒園間近の出来事でした。

年長組に在籍していた自閉症の男の子のこと。それまで順調に来ていたのですが、ある日から気に入った女の子につきまとい、噛みつきを繰り返してだんだんエスカレートしてきました。噛みつかれた子の父親が訴えに来園したのを思い出します。



♪年少さんのカスタムあそびと歌・楽しそう！

「どうして園はそういう子どもを受け入れるんだ、他の子どもの安全や教育のことをどうかんがえているんだ！園としての姿勢をきちんとしてほしい！」という意見だったと記憶していますが、そのとき、私は怪我をさせたことへの謝罪はきちんとしましたが、「どうして、障害のある子どもとの共存を温かく見守ってやらないんだ、この人は?!」と逆に腹を立てて「所詮、考え方の違いだな」と掃き捨て、父親の訴えと私の考えはついに交わらなかったこと。今となっては、このときに気付いていれば・・・と思うのです。

◆新しい視点で

Aちゃんのお父さんとの話し合いが終わって、私は今まで障害児を受け入れるということ、幼稚園のスタッフと当事者の親御さんとの狭い関係しか視野に入れていませんでした。クラスメイトには迷惑をかけないように最善の努力をしながらも、これだけ

やってるんだから、あとは我慢して！というところでしょうか。

それだけでは足りないことに気がきました。実は、園にいる全員を視野に入れた“受け入れ体制作り”という視点が欠けていたのです。

これは、小学校で特別支援学級などが整備されてきた今の時代だから出てきた視点かもしれません。ひと昔前は、障害を持っていても認めない親、公にすることを嫌った親が多かったように思うからです。実際、子どもの発達の遅れを親御さんに話したところ、「そういう目で見えていたのか！」と信頼を失って退園されたこともあります。なので非常にデリケートな問題として扱うことが多い問題でした。



♪ 年長組・発表が終わってホッとおちゃらけ退場のひょうきん二人

(^-^)

さて、事前説明が長くなりましたが、12月の出来事から1ヶ月後、私なりに方針を決め、3学期の保護者会で「障害児を受け入れることについて」の説明を行いました。

●以下が、保護者会で配った資料です。（ほぼ原文のまま掲載します）

専門家に相談したわけでもなく、わたしの経験と経営的側面から考えてみた結果です。

マガジン読者の皆様がこれをお読みになって、もっとよいアドバイスを頂けたら有難いです。

原町幼稚園 保護者の皆様

これまで、原町幼稚園ではしょうがいを持ったお子さんを受け入れてきました。しかし、そのことについて保護者の皆さんに、周知と理解を求めてこなかったこと、そのために、園内に誤解や不協和音が生じてしまうこともあり、私は園長として大変反省いたしました。

今後は方針をはっきりさせることで、原町幼稚園の中では、お互いに理解し合って受け入れ合う姿勢が作られるように私共も努力して参ります。皆様も方針をご理解下さりご協力をお願いしたいと思います。

(マガジンには添付はしてありませんが、発達障害児の一般的な解説書(イラスト入りでわかりやすいもの)のコピーを資料として付けました。)

しょうがいを持ったお子さんを受け入れることでの良いこと、困ったこと、そのほか今までの経験から感じたことをお伝えしようと思います。私見に近いものも含まれていますが、皆さんにご理解いただきたいと願っています。

1 大きなメリットは、一緒に生活する子ども達の精神的な育ちです。

誰でも我が子に「思いやりのある人になってほしい」と願います。

思いやりや優しさは「思いやりを持ちなさい」や「やさしくしなさい」といくら言っても身につくものではなく、何回もその行為を行ったり、身近な人がそうする様子を見て身に付けていくものです。

「しょうがい」を持った人が世の中にいること、ちょっと違う感覚の人がいても、こう付きあえば大丈夫、手伝ってあげよう、受け入れようという気持ちが生活を共にすることで育てきます。人を受け入れる心の器が大きく、言い換えれば思いやりの心が育つのです。ノーマライゼーション（障害者と健常者とは、お互いが特別に区別されることなく、社会生活を共にするのが正常なことであり、本来の望ましい姿であるとする考え方。）を肌感覚で身に付けられるのです。これは、頭で学習して身に付けられるものではありません。

2 困ったことは、しょうがいのある子どもとのつき合い方を模索している段階(まだ付き合い方が周囲の大人も子どもも分からないとき)で生じやすいと考えます。

大声を出したり、座ってられない様子を見て、その理由がなぜだか分からない場合、ふざけているんだと思った周囲の子どもがつかれてクラスが落ち着かなくなることがあります。また、言葉での表現が出来ない場合、ボディータックしたり、ときには周囲の子どもに怪我をさせたりします。しょうがいを理解していない健常児の対応がパニックを引き起こす原因になることもあります。逆に、大好き！という表現に勢いがつき過ぎたり噛みついたりする場合もありました。

その子の持つしょうがいの特徴を把握し、周りとの協調を促す対応がとれれば、徐々に本人も、周りの大人や子どもも付き合い方を学習していき、ほぼ防ぐことができるようになります。ただし注意と配慮は怠らないようにします。

もう一つ、健常児が群れになってしょうがい児をバカにしたりする現象が現れると健常児にとっても健全な精神の発達を促すとは言えなくなってしまいます。（自分達と違う者を排除するという「いじめ」につながる行為なので気をつけなくてはなりません）。

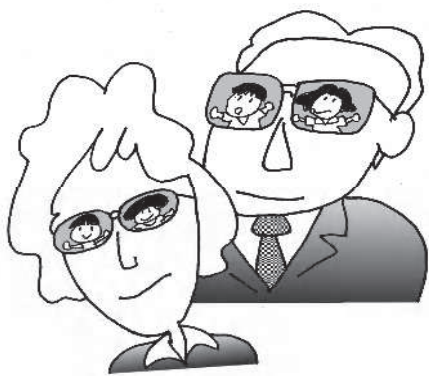
3 「許す」行為について。

これは、子ども同士のトラブルを容認する意味でも、トラブルを未然に防げなかった私共の対応を弁護するつもりでは決してありませんが、誤解を恐れずにあげておきます。

故意ではなく起こったトラブルは、「許す」という行為を引き出しやすいものです。しょうがいのことが理解されてくれば、許すしかない、という状況になります。（たとえ友だち同士のケンカでも最終的に謝り、許すしかないのです）。許せる人は精神的に強くなります。嫌なことが身に降りかかってもそれを許して気持ちを切り替えることができるからです。子ども同士のケンカでも「ごめんね」「いいよ」という関係が成立したとき、両者ともにホッとした「よかった～」という顔つきになります。いつまでも問題としてそれを抱えて生きる人より精神を良い状態に保つことができるのではないのでしょうか。

直接トラブルが生じた場合でなくても、「僕はしっかり座っているのに○ちゃんはどうして

歩き回っても許されるの？僕だって一緒にやりたいよ」・・・最初はこんな気持ちでしょう。それが次第に動じなくなってきました。忍耐力と許せる気持ちが育っている。喜ばしいことだともてはどうでしょう。



4 「障害のある子どもだけ特別扱い？」という疑問はつきまともかもしれません。

このことについては、こう考えています。
クラスの子ども全員に平等に愛情を注ぎ、一人ひとりの育ちを保障しなければならないのは教師の義務です。ただ、10のサポートを必要とする子どももいれば、5のサポートで目的とするレベルまで育つ子どももいます。

たとえば、「ブランコを楽しくこげる」ということを考えてみて下さい。ブランコのこぎ方を1回教えてだけで自分で楽しくこげる子どももいれば、何回もブランコを押してあげないと、なかなかこげない子どももいます。幼稚園や学校という公教育では、「みんなの幸せ」を大前提に教育を行います。なので「ブランコを楽しくこげる」という目標をみんなが達成するために、一人ひとりへ行う教師のサポートは違ったものになってきます。生活面や精神面での教師

の関わり方も同様です。みんなが一緒に生きていく社会では、お互いに影響し合い、一人だけが良くなっても幸せにはなれないからです。

5 職員の加配(必要に応じて増員すること)について。

経営的な問題にもふれなければならないでしょう。しょうがいのあるお子さんを受け入れるということは、サポートする職員が必要になってきます。人件費等の経費がかかるということはあきらかです。

家庭や子どもの事情で園への納付金に増減はありません、全員同じです。しかし、静岡県私立幼稚園振興協会、静岡県、沼津市で実施している障害児受け入れ園への補助金制度のいずれかを利用することで、条件によっては加配された教員の人件費をまかなうことができます。そのためには、それだけでなく精神的な負担の大きい親御さんに診断書等の書類を用意して頂いたり、相談の時間を取って頂いたりという協力によって、書類を作成することができます。

今年度は、9月に提出した県への補助金申請が審査を通ったという内示が、先般1月4日に担当者より届きましたので、園からの費用持ち出しはありません。この補助制度が廃止されない限り、同様だと考えます。

以上、私の考えをふまえた上で下の受け入れ案をお読み下さい。

この方針案を理事会に提出して承認されれば、来年度の入園案内から記載いたします。

私も本気で考え、建前でなく本音で文章を綴ってきました。保護者の皆さんもご意見があれば理事会提出前に私にお寄せ頂けるとありがたいです。「あ、そういう考え方もあったのか」と気付くことを大切にしていきたいと考えています。

心身にしょうがいを持ったお子さんの

受け入れについての方針(案)

- 1 一円で、あるいは教員もしくは保護者の付き添いにより集団生活ができ、発達が見込めると認められたお子さんについては、しょうがいがあっても入園を受け入れます。
(園長、主任教員と保護者、幼児の面談・観察により判断します。)
- 2 お子さんのしょうがいについては公表します。
医師の診断があれば、その内容について全園児の保護者にお知らせし、理解を求めます。
- 3 お子さんの発達に最善を尽くして頂きます。
そのために、専門機関での治療も幼稚園登園と並行して行って頂きます。
- 4 園が行政等の支援を受けるため、診断書や同意書の提出等、協力して頂きます。
(専門家によるアドバイス、教員加配目的の補助金申請)
- 5 受け入れ人数はしょうがいの程度にもよりますが、学年に1名。軽度の場合2名まで。
- 6 年度の途中でも、発達が見込めない場合、集団生活が困難な場合は退園になります。

○現在、原町幼稚園に通うしょうがいをお持ちのお子さんは2名。(ここでは具体的に名前と診断名、現在の様子が記載されていますが、マガジンでは省きます。)

二人とも原町幼稚園の大切な仲間です！過剰に意識せず、二人のしょうがいを理解した上で付きあっていることを願っています。大人の姿勢が子どもに影響を与えます。

以上、保護者会ではこの事について意見が出ることもなく、おおむね好意的に聞いて下さるお母さん方も多かったように思います。(その場で異論は出しにくいということもありますが。)

その後、Aちゃんも少しずつ発達を見せ、クラスの子どもの理解も進み、クラス自体は良い状態になりつつあります。(まだまだ手はかかるし、行事などでは目立ちます。)



♪フィナーレ・全園児での歌「せかいがひとつになるまで」

◆ちょっとした変化

その後、こんな変化が起きました。

まず、在園児の下のお子さんが障害を持っているお母さんが相談に来られて、「再来年ですが、入園させてほしい」というご相談です。方針については保護者会で聞いたので理解しているというのです。そのときに、「私はこの子の障害について、会う人会う人にいちいち説明して歩かなければならないんです。だから、園で発表してくれるというのは有難い。」という話でした。

もう一つは、在園中の年中児で障害を持つお子さんのお母さんから手紙を頂いたことです。

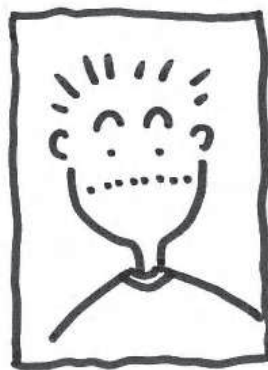
そこには、「発達障害を公表したことで、不思議な動きをするのはそのせいだ、と周りの保護者の方々が理解し、温かい目を向けて下さってありがたく思っています。全ての方々への理解は難しいですが、親しくして下さるクラスの皆さんには本当に感謝しています。（中略）今は園全体に公表して夫婦ともに清々しい気分です・・・。」

いいことばかりとは思いません。今後も受け入れることでのメリットやダメージ、悩むことも多いと思いますが、一歩前にふみ出せたかな、と思うのです。



♪顔を見合わせながら歌ってます(˘o˘)

学校法人松濤学園 原町幼稚園
園児約 200 名 6 クラス
幼稚園歴 27 年（内園長歴 8 年）
<http://www.haramachi-ki.jp>



ツルヤシュイチ